014596-000-1

特42-529

太諄辞考

柴田　花守／著

M5

ABB-1015

特42
529

明治二十五年文部省寄付

太詔辭考序

今ゝむかし聞えけらく。

甫卜仕へ奉る時ゝを保可美惠美多米ち語を唱ふとろ此ハ著辭にやと白しゝ宣ふ

九さゝまゝ彼ハ遠津神笑多倍ちの話の轉きまゝら〳〵於考へてと云ふ宣ふしゞ。

ゝれゝ後ゝ熟〳〵惟へで

皇御祖神伊邪那岐伊邪那美二柱の大神
ぬさを御子生給ひて。ちらた
天津神々御言を請ひ給ひ時。
天津神の命もちて。太占ト相へて。とある
其占ト給ふこと。事だて。此御語をバ宣
ひ出け牟。遠津神とハ。無始自在ます
せる

天之御中主神を称せにて。神ゐまれ人ゐ
まれも。事ごとく為さむとする已ざ有
ば。豫め成を。方定めてトふるを。
いぢら可ゝ給を。不言無為の大
御心ゆゑ。必解顔啓歯ともなふ。其笑
給ふ象を。齋ひ模せとゝて。鹿骨及
龜甲ゐも。兆形鑒ゝて。灼剥ゝて。其火

坂乃之く方に擾て、畏き神の御心を
〳〵覩し知る神事なまぐ天之石屋戸
み當時八百萬神等の招事にも諸唱
へまし汁乎故今も神ゐ祈願せんをう
そ被禊や何やにあ此神語を白〳〵
可け乎と既くより思ひ渉れるをもー
柴田翁い此草案を視せら被ぬ宣ひ出け
る權輿乃考へこゝろ惟へるとハ異な
き・いと正しき神語と考定められあるを
師翁乃意ゐ得られざりけれで〳〵かれ
今の氣吹舌大人に談して〳〵如斯印
本とせらるゝをあんず遠津神欣喜給
そぞろめや母
明治五年とい不とし秋ぬむ月の

望(モチ)でかり 嵜崎 長七並 主馬

寸栄(サキ)ひたる国を宮雲(ユトダマ)のよう
ある事ありて
あるじぎる神 なるせそ
人なるものでありて 幸(サチ)
久程 ありて
きそぐの海 ありを

もてものぼりまさる意（コヽロ）のあるほどこそ
そのことをまもりおこなふことをもとゝして
をしつゝまさるべくつとめはげむことを事こゝ
もて世（ヨ）のことわざ詞（コトバ）のもとゝするをもて
世（ヨ）のことわざ（モノシリビト）をもとゝするをもて
いにしへ人をあがめ神（カミ）をうやまひ霊（タマ）をたふとぶこゝろ

いでゝみるもの古人（イニシヘビト）の夢（ユメ）のごとくにせんものこゝろまさり賜
ものゝて云（イ）ふ事（コト）の幸（サチ）ふことをもとゝして今（イマ）
物（モノ）ゝ知（シ）れ古人（イニシヘビト）のうつゝの世（ヨ）をおくるがごとくなるをもて
あひをもてそでめでいつゝ度（タビ）もる人（ヒト）のごとく
ものをんとてこゝろびおもふ自（ミヅカ）らおのづからの
てまもるつゝしみもなん。

太諄辭考

へもゝそるゝ　肥前小城　柴田花守謹述

此詞を三種被と云ふ小附て或人ト之玉ホは鉾カミ々鏡の中畧ヱ＝＝＝

り古支記にも沼矛と有ねど瓊鉾もヌボコと訓べき事疑ふし又玉をト鉾戈ホとのミ云ふ事も共に例ふくカミを鏡の中畧と云ふも非也古史傳小釈きより古支記小於是副賜其遠岐斯八尺勾璁及草那藝劔云く又書紀の一書に賜天津彦彦火瓊々杵尊八坂曲玉及八咫鏡草薙劔三種宝物と有ね劔こそ三種の一ふ神宝を三種の神宝と爲る事ふし古語拾遺小々以テ八咫鏡及草薙劔二種の神宝授賜皇孫永爲天璽ノ宝自従と有り又或人のトホカこは尊き神也と云ふ一説有由云へど尊ね夕フトキふて仮字違へり又神々尊く在まに事云ふ迄も無き事にてかくばこのり短き詞小尊き神と云ねむハ甚拙く聞ゆるをや又我友南里有隣此詞を三種祓と云ふこと神宝をさをふ々有らで中臣の祓詞と六根清浄の祓と合せて三種祓と呼ふれしを誤りて一つの名と爲しにやと云へど六根清浄の祓々後世作り設けし物ふれど祈禱の業をる折大祓と同く讀來るものふれば此祓と共ふ三種とさへをりけね今の世ふ有る折本にも八種を集て八種祓と上書しさるを以ても此説實にあされどとぞ思ふ此詞は元愛き壽言ふねだこそ上古よど貴賤ふべて白

傳へさりけれ。爭本つ意を考へ得てしがと。年來祈り居ㇾ
し。近頃思ひ得たる事有るを試小云ㇾ。
先トホカミは遠津神也。津ハ助辭。添へても畧きても意は同し。萬葉集
小遠津神吾王と詠るも。人間に遠く尊く在ますを崇め白
せる由みて。明津神吾皇とも。王々神にしまをすとも詠る。是
則現小坐ます天皇を白奉る明證也。此詞天地万物を製造
給ひし本津御祖の大父母。天出御中主尊。高皇産靈尊神皇
産靈尊を始。天津神諸の御上よㇾ御代ごと。天皇家ごの氏
神祖神まで。み係れり。
卫ミタメは或人の説の如く咲給の約也。嚬樂惠良惠良。咲。
卫マヒワラヒふと同言也。總て人の世小在る。嬉しく樂し
けれど。打咲怒り憤る事有れど。其色面小見る、常の事也。
されバ臣子としては其君父を慰め奉ㇾて常に樂しと打
咲給ふを見るむこのり。嬉しき事々有らじかし。
懸巻も綾小尊き皇神の御上を。この小かく小論ハ。最畏し
とも怖けれど。石屋戸の段小天兒屋命の布刀詔戸言禱白

テ

而ク有ル詔戸々ゝ最モ古文ニテ美ハシウアケむを、世ク傳
そらぎるゝ口惜き事也と、鈴屋大人も歎のおされむ、誰も
然ぞ思ひ居るべけ牟と、花守慎て憤思ひ廻らそにまづ古
支記に、此種々物者布刀玉命、布刀御幣登取持而天兒屋命、
布刀詔戸言禱白而云々、書紀の一書ク時中臣遠祖天兒屋
命、則ち神祝々ゝ又廣厚稱辭祈啓焉云々大御神曰頃者人
雖多請未有若此言ゝ麗美者也、乃細開磐戸窺ゝふと有る
をもて、いこのにも長々しき壽言ふアけむと覺しけ牟と長

きゝ只太玉命の取持せる、種々の御幣物を賛稱さる辭ふ
は事諸の祝詞の例を見ても知らる、也、さて如此稱言竟
白さる後ふ必願ふ支實我白給ふべきはこゞ也、今竊ふ其
情態に就て考ふるに、宇受賣命、神懸りの體ゝて、胸乳をか
き出、裳紐を陰ふ押垂れ、小竹葉を打振り、覆槽踏とゞろ
し給ふを見て、神さちこゝと笑よめきて手を拍さ、
き、彼稱辭の後ふ附て、トホツカミエミタヽへことゝ數多
度白させ給ひけむとぞ思ゝる、いのふとふれバ、天照大

御神須佐之男大神の御荒びを無状おもほしめして、磐戸を立てかた隠り給ひければ、常闇の世と成はて、八百万の神さち愁恐まし、須佐之男大神をぞ、いのる罪を負せてもさまざまに遂ひはべらむ、只御憤を晴させ給ひ、御心地能打咲せ給へ、うち咲せ給へと白すより外に願ひ奉有らざるべければ也、さらば種々の御幣を賚給ひし辞も絶て傳ゑら糸、神さちの祈給ふ主と有る太諄辞の要文ト

ホツカミヱミタメへと云ふ神言ハ神ぶのら口々に相傳へて遺れると云ふをいさく強言と思ふべ、のらば、今の世までも心なき賤山賤小至るまで、神の御前小額づく折々、必此祝詞を白す事と思ひ深來れるも、神代のふらむしの存れる一つの明證ふり、

此詞古書小記さゞるを以て、人々等閑小思ひおとせるの、今能意ふに、古書小記されざる故ハ、凡て祝詞は祭祀業なる折々に作り出長我も暗よ誦がをきを以て、書附て讀事ふる我、此祝詞々書附るよ迄もふく、世人ふべてロふねて

白況(ニヨシ)なかるべし。凡て言を飾(カザ)り文を巧(タク)みて書記(カキシル)しさる愛(メデ)さき古言(フルゴト)のロ々は相傳へて實(マコト)を失(ウシナ)ふ事多(オホ)きに斯(カク)ぞ有(アル)ハ尊(タフト)しとも尊しこの存(ノコ)れるのし。

大祓詞ハ天津祝詞乃太祝詞事乎宣礼と有りて此宣礼と他(ヒト)ハ今(シマ)を詞まて別(ホカ)ハ他ハ今を詞まて別ハ太祝詞支と云ふもの有るを宣れとと云ふ意(コヽロ)也。

上に云ふごとく。トホツカミヱミタメへと云へる祝詞即天津祝詞、太祝詞事にて、謂(オモ)ふみ古へ朝廷二季の大祓ハ罪の重(オモ)き軽(カロ)きにまさごひて祓具(ハラヘツモノ)をいざして此祝詞を宣(ノリ)祓

の業(ワザ)を爲(ス)る常の事ありけむ。神業(カムワザ)ハのこ爲(ス)る世と成て。漸々(ヤウヤク)廢(スタ)れ行(ユク)ハ此詞の太諄辭ぞ有りて。只神道者の三種祓とて白(マヲ)す事とハ成ぬるぞし。かゝれど物ハ書附るほどの長き物ハて々無(ナ)のごし事明(アキ)らけし。抑(ソモ)大祓の支は大宝令ぶみも載(ノセ)られて重(オモ)く仕御規式(ギシキ)にし有れバ書附るほどの長きものゆゑせむ。何とて其太祝詞言の絶(タユ)る事有べきや書紀ハ諄辭と書れるハ諄字書ハ懇誠(コンセイノカタチ)貌(ヲカタチ)と有れど。くり返(カヘ)し幾度(イクタビ)も白(マヲ)す義(コヽロ)ぞるを从

て。も長のらぬ事を思ひ知るべし。我眉毛の見えざるこの如き餘り近くて見附ざりけむ。たゞ上古の事は。思ひの外なる安きものゝ。て言痛く理深げふる事ハ無き物ぞこのし。斯心得る時ハ。大祓詞は譬へハ藥の能書てふ物の如く真の藥の價尊きゑ。此天津祝詞太祝詞言トホツカこヱこタ

へふは事著くて。綾よ尊く愛き太諄辭言にてぞ有ける。

近世名ざゝる大人さちの。此祝詞ゑ龜卜の占業をる時用ふる物ゝて。被詞ゝ有らざる由云ゑる、一わさりゑ然る支のやうふおど。龜卜の法ハ。後世漢土ゑ已渡りさる物ふれむ。其おゝ用ふる物ふらましのむ。漢語ゝてぞ有るべきに。

正ト考ゝ尚昏周昏の洪範の稽疑よ龜木の支よほけて曰雨曰霽曰蒙曰驛曰克。といへること。の見えさるを。孔安國の傳よ。五者ハト兆也常法也と注へり。町躰の縦横トホカこヱタメの如き五位の名有るよ似さり。云々とあよゑ。此雨霽蒙驛克の五字を此ゑ美しき倭語ふらぞや。さおば若用ふべき支ふるゝ。

や神代より有るところの。鹿占爲る折ゝ天津神の御教を請ひ奉るとて愛き壽言ふれむ此祝詞を申ふらひしの。龜卜を用ひらる、御世とふりて後も猶此詞ゑ其まゝに

唱へもし其業（ワザ）の上よも用ひられさりけむの正ト考ふ一傳ふ火をき
を内むトホカミエミタメを唱ふる也とあり又同亀トふ
のへて用ふる事と成ぬれど古のそのふト法ハ猶もとの
ま、ありけむときこえ又斯（コヽ）方ふて亀甲を用ふる事をこ
そ倣ひさらめトふ法ハ猶古傳（コト）のま、ふ用ひさりけむ事ハ
波ミ迦を用ふる古傳（ウラトヽ）の傳ハ出るうへふ古昏共ふ亀トの
如く鹿の肩骨もてトふる由これの祝詞ふえトふ部家の家説
ふもしこの云傳ふれむ鹿を亀ふ代ふる古
傳のト法の遺（コト）まるものある事明らの也そハ譬（タト）へむヒト
フタミヨイツムユナヽヤコヽノタリモヽチヨロツと云
詞も愛（メデ）き諷言（ウタゴト）ふるを其数十百千万ふ合へるを从てそ
の數ふ代て云ひふらひつれバ今ふ一二三の訓の如思ひ

ヲ居ると同しき也されはヒトフタミヨ云々を數の事と思
ふむ後世ふるふ等（ヒト）しく此祝詞を龜トの事にのミ用ふる
物と思ふむ大ふる誤（アヤマリ）也さゞに誤るのミふらず斯（カヽ）むの已
上（ウヘ）ふく愛（メデ）き神言を却（カヘリ）て云ひ貶（オト）して捨（ステ）はてむとをるむ
甚も愁（イト・ウレ）さく歎（ナゲ）のむしき事の限（カギ）りふらぢや

遠津祖神を崇めまつる事を書紀に神武天皇四年に云々立靈時於鳥見山中云々用祭皇祖天神焉と有りて御代々々の天皇より臣御蒼生に至るまで皆祖先を崇め奉る事を朝の教の大本也己惰弱身を顧ずして不應言擧をなす所業ふさど同じ志振起しく古へ學ぶ人の爲に試に驚のし置くにあらむ惶。

トホツカエミタマヘちふ神言ぞ天津祝詞太諄辭言鳥跡ふみを藏さで神ふがら宣傳へさる布刀詔戸言

附言

此考を余早く弘化二年に物しつるを筑後國久留米の舟引某ゟ見をさりしに其叔父ある某も同考ありとていさくめで歡びて之を秋原二位卿の御家ゟてや即遠津神の訓を秘支として傳へらる、よし云おこをさるハいのふらむ近き頃長嵜人藤村光鎭の寫もてる平田大人の大祓太詔刀考を見しに御禊祓を以て太詔刀言と定ら祓をりきさてハ余の考ハ徒事ふ

已けりとほいなきおごらかきやり置しゐ又大人の
古史本辭經ゐ言語の道を學むまゐ古典ゐ據らぞ
む有べのらを然りやあぜど書籍ゐ記し傳そらば古
へとり詞ゐのこ唱へ來りしも多のるべけぜむ古へ
ゐ例ふしとて強ゐ捨べき事みもあらぜのし云〻又
神代ゐ太詔刀と云物數多有けむど論れさるを
見てむもしさる中の一つゐても有むにを埋ぜ果
むもあさらしき限りふめりと思ひふりはさ大人の
考ようちあひさる處ふきこよしもあらざれバ可や否
やハ見む人の評ゐ任をてむとて門人青山垂穂ゐ書
清めさをる事とを成ゐさりさて大人の考ゐ打合さ
る條二つ三ゐ書出むまづ
大祓太詔刀考ゐ云〻この、れバさきにまづ祓戸神ざちゐ
白太祝詞ハ別ゐ在けむを弐ゐ載漏されをる事疑ゐし。
其ハ彼大祓詞ゐ大中臣云〻天津祝詞の太祝詞支乎宣礼
と有て如此宣らでと承さるゐ熟く心を着て思ひ辨ふべ

し神ヨス白べき祝詞を別ヨサ依し賜へりしの漏さる事更ホ
疑ウツふきものをや若然シサらざとさバ太祝詞支乎宣礼とて何
を宣る事とこのせむ。如此宣らばと承ウケるも必ズ前ホ宣ルべき
祝詞の有て其を宣竟さるを承ウケて云へる辭ゴトバぞ其宣る
べき祝詞のふきをいこのよをむ。
此條クダリオノ余の考ホ大祓詞ヨ天津祝詞の太祝詞支乎宣礼
と有て此宣礼とハ他ヒトヨ示シタせ詞ヨて。別ヨ太祝詞支と
云ふ物有るを宣ヨとと云ふ意コロ也といひしヨ打合ひ

さり前へヨ宣るべきといふそれを
さる条ヒ末ヨいふべし。アルヒトナホキクリセツナ
又或猶舊説ヨ泥づこて予ノ説セツを信ウケざるホ近く譬へて諭
けらく。さよざくヨ呪禁ジナヒの歌ウタを書て人ヨ贈オクるとて。其消息セウソコ
ヨ呪マジナふべき方ハウハあらバ〳〵の妻して。此歌ウタを誦トナふべし。かく
誦へさらむヨら其痛イタミそやのホ癒イへむ物ぞと云ひおく
りさらむヨ使者シシヤミナ途ヨて其さよざくを失ウシナひ消息ぞこのりお
くせるを受ウケる人。其ソを讀ヨミて歌を誦トナふべしとも即此消息
の事ぞと云て。さよざくを取トリ落しる事ヨ心つのぞあら

むの如し。太祝詞支の尊き詞ある事を今更云ふまでもあれども彼太祝詞事のふくてた此消息は等しき事心を平らして熟おもふべし。

此條余の考は太祓詞を譬へば藥の能書てふ物の如く真の藥の價尊きハ此天津祝詞太諄辭トホツカミヱミタメヘふる事著くて云ことといひしは打合さり。

大人ハ御禊祓の事也とせしていたさねど。トホツカミヱミタメヘを一つの太祝詞支也と心付れふど。窮めて余ご加く論らるべくもれバ。よく味ひもてゆうた同意ま落ふむものぞまこ。

さて又後世ま集たれる諸小宣聞を大祓詞を神ま白せさへ非言ふる小況て太祝詞支乎宣礼といふ下ふて。大祝詞言ぞと心得さる文を唱ふる事も非事とおぼゆ。必先神に太祝詞を白して後小太祓詞を唱ふべきもの也。

此條既小辨へられさる如く。六百年以前の書ま載さる清淨偈。或ハ唯受一人秘文ふどいふ穢らもしき物どもを太祝詞言ぞと思ひ違へさるを憂ふ憤こて論れさるめれど。猶熟思ひ味そへるま前ま宣置こ

る文を受(カク)て如此宣らむと續(ツヾ)くべき躰(サマ)もあらぞ。天津祝詞の太祝詞言乎宣礼と宣りつる處より。一つの天津祝詞を宣り其を如此宣らむと承べき運(ハコ)びの語勢(ゴセイ)也。即(チョク)此大祓詞ぶ。如此(カクヨサシ)依志奉志。如此出ば。如此聞召氏ば。如此持出往者(モチイデイナバ)。如此可(カ、ノミテ)呑氏ば。如此矣氏ばぶ。其續(ツヾキ)の文を承(ウケ)るまで。全(マタ)く前文を承宣(ウケノル)もあらざるこ(サ)とを悟るべし。こゝを大人の御心(ミタマ)も違(タガ)へるやうおゝ(コウセイタニン)ど。後世他人(アカイタアト)の爲(トモ)ぶ悖(モド)のれむとり。ぶ崇尊(タフト)ぶ輩の中(ナカ)に

り考漏(カムガヘモラ)さゞむ事を補(オギナ)てむふぶでふ事このあらむ。大人ハ道の爲(ヒロ)ぶ廣く益(ヤク)を索(モト)めらて。俗學者(ゾグガクシヤ)の強(アガナ)ひ(オノ)の説(セツ)を立むとそるまろう孫き類(タグヒ)もあらざれぞ。其御魂(ミタマ)もおどか嬉歡(ウレシミヨロ)ぶまさらむ。猶打(タヾ)あひとる件(タダリ)いとまゝしき事とも多(オホ)のぞと。大人の考をよく讀見む人ハ。早(トミ)く悟(サト)りぬべけまバ。今(イマ)ハ覺(シル)り智べけまバ。漏(モ)らしつ。

浪華(ナニハ)の醫家木村一枝(イチシ)云。已の古典學の師。野ゝ口隆正翁の物語よーホカミヱタメと云ふハ。稲穀(イネ)のめで

さきを称(タヽヘ)る神言(ン)なして。即天津祝詞の布刀祝詞言乎宣礼と有る處也。大祓詞は。天津祝詞の布刀祝詞言乎宣礼と有る處小て。必此神言(ン)を宣(リ)て如此宣波と受(ウク)べきかりと自(ミカ)ら考得(カムカヘエ)らるる縁故(ユヱヨシ)を五六枚小記(ヒラシル)させるを与(アタ)へられしが。今ゝ頓(トミ)小見出ぞと話(カタ)りき。此話まで已この考は打合(ツヾメゴト)とれバ昼加(カキクハ)へはさて是までトホカミエヒタメと約言(ツヾメゴト)なて唱(トナ)へしを。今より舊(フル)きは返(カヘシ)てトホカミエヒタメへと白(マヲ)まく思ひ決(ヂメ)て先神字まて。

如此物(カケヂク)して掛軸とふかし。朝夕打向ひて敬(イヤマ)ひ額(ヌカ)づき拝(ヲガ)み唱(トナ)へ奉りぬ。又大祓詞を誦(ヨ)む折ハ。即大人の撰(エラ)び定(サダ)めらるる御禊祓(ミソキハラヒ)。

高天原(タカマノハラニ)尓神留坐(カムヅマリマス)須(ス)神魯岐(カムロギ)神魯美(カムロミ)乃命以(ノミヨトモチテ)豆(スメ)皇御祖(オヤ)伊邪那岐命(イザナギノミコト)筑紫(ツクシ)乃日向(ヒムカノ)能橘(タチバナノ)小戸(ヲド)乃阿波岐原(ハラニ)尓御禊祓(ミソキハラヒ)比(タマフトキニ)給布時尓生坐(アレマセル)祓戸(ハラヒド)乃神等諸乃

マガゴトツミケガレヲハラヒタマヘキヨメタマヘト申須事能由遠。
狂支罪穢乎拂比賜幣清米賜閉登申須支能由遠。
アマツカミクニツカミヤホヨロツノカミタチナトモニアマノブチゴマノミ、
天津神国津神八百万乃神等共尓天之斑馬能耳
フリタテテキコシメセトカシコミカシコミマヲス。
振立氏聞食世登恐美恐美白須。

此文を誦て次小大祓詞をよこ。天津詔戸の太祝詞支
乎宣礼と云處まて。古への如く大祓の式を行ひ給
ふおらハ集待まる人ミトホ
ツカミエミタメヘと十遍計
り白しさらぬ折ハ自白て。如此宣らばと承誦て全
き祓をなそべき支小ことそ。

元治元年の秋

柴田花守先生書

太諄辭言 神代字石摺

明治五年壬申八月
同年九月發行

東京 北畠茂兵衛
同 長野龜七
西京 池村久兵衛
尾州名古屋 粟田東平
勢州津 篠田伊十郎
三州豊橋 神戸藤次郎
信州飯田
肥州長崎 小野左右助
薩州鹿兒嶋 青木恭助
大阪賈弘所 順慶町四丁目 中井源兵衛
同 新平通四丁目 福田友七
大阪書林 田中太右衛門

岩崎長世先生閲
柴田花守先生著

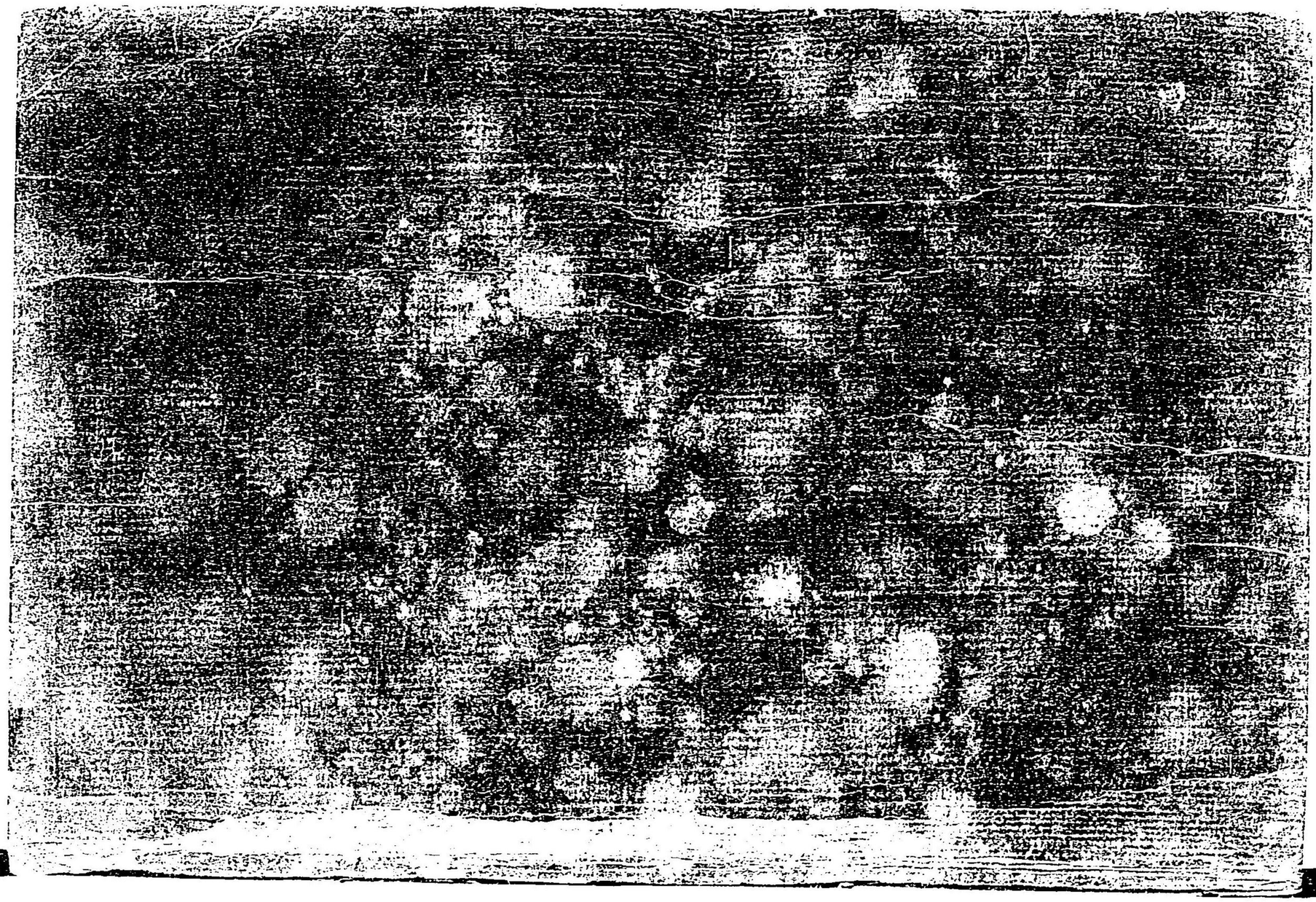
マガゴトツミヤガレヲハラヒタマヘキヨメタマヘトマヲスコトノヨシヲ
狂支罪穢乎拂比賜幣清米賜閉登申須支能由遠。
アマツカミクニツカミヤホヨロツノカミタチトモニアマノブチゴマノミ、
天津神国津神八百万乃神等共尓。天之斑馬能耳
フリタテテキコシメセトカシコミカシコミマヲス白須。
振立氏聞食世登恐美恐美白須。

此文を誦て次小大祓詞をよこ。天津詔戸の太祝詞支
ヨミツギ
乎宣礼と云處まて。古への如く大祓の式を行ひ
ふとまおらひ集待まる人ミトホ
ツカミエミタマヘと十遍計。如此宣らばと承誦て全
ウケヨミマヲタ
り白しさらぬ折ハ自ラ白てこそ。

元治元年の秋

岩崎長世先生閲
柴田花守先生著

柴田花守先生書
太諄辭言 神代字 石摺

明治五年壬申八月
同年九月發行

東京 北畠茂兵衛
同 長野龜七
西京 池村久兵衛
尾州名古屋 粟田東平
勢州津 篠田伊十郎
三州豊橋 神戸藤次郎
信州飯田
肥州長崎 小野左右助
薩州鹿兒嶋 青木叢助
大阪賣弘所 順慶町四丁目 中井源兵衛
同 新早通四丁目 福田友七
大阪書林 田中太右衛門